人と環境 Vol. 8: 41－47 (2015)

【評論】

カンボジアにおける小児の生活環境および医療の現状と今後の母子保健活動

谷畑　利知子*

大阪信愛女学院短期大学

The Present State of Living Environment and Medical Care, and the Promotion of Maternal and Child Health, for Children in Cambodia

Richiko Tanihata

Human and Environment Vol. 8 (2015)

大阪信愛女学院短期大学カンボジア研修旅行に参加し、内戦後の復興をめざしているカンボジア国シェムリアップ市を訪れ、市内にある本学の設置母体からの支援に基づき設立されたアンティエ・プレスクールやアンコール小児病院の見学、ボランテイアとして孤児院などの施設訪問を行なった。同国の豊かな自然とともに、戦争によって多くの孤児たちが生まれ、未だ内戦の混乱をひきずっており、多くの人びとが教育の機会さえも奪われ、幼い子どもたちが生活のために観光客を相手にみやげものを売っている現状を目の当たりにしてきた。学生の研修旅行に同行する中で見聞した戦後のカンボジアの反映とは裏腹の人々が置かれていた過酷な現状を振り返って感じ得たことをまとめた。

キーワード：戦後のカンボジア・子どもの生活環境・孤児・医療事情・母子保健活動

１．はじめに

2014 年 8 月、大阪信愛女学院短期大学が毎年実施するカンボジア国シェムリアップ市への研修旅行「カンボジア研修」に参加する機会を得た。学生とともに同国を訪問する中で、文化の多様性をふまえ、同国における子どもの医療事情などについて聞き取りを行うことができた。本稿では、聞き取りにおける結果および文献により知り得た情報について述べ、そのような内容をふまえ、どのような母子保健活動が必要と考えられるのか考察した。

*大阪信愛女学院短期大学
〒538-0053　大阪市鶴見区鶴見 6-2-28
Tel: 06-6180-1041, Fax: 06-6180-1045
E-mail: rtanihata@osaka-shinai.ac.jp

受付：2014 年 12 月 20 日　受理：2015 年 12 月 28 日
©2015 大阪信愛女学院短期大学

２．カンボジア・シャムリアップ市の概要

今回、研修で訪れたのはカンボジア・シェムリアツプ市であった。カンボジアはインドシナ半島の中央部やや南西側に位置し、北西にタイ、北にラオス、東と南にベトナムと国境を接している。中央平原東寄りをメコン川が北から南に流れ、中央平原の西寄りにはトンレサップ湖がある。このトンレサップ湖は「伸縮する湖」として知られ、雨季にはメコン川の水が逆流して増水し、乾季の面積の 3 倍以上に膨れ上がり、周辺の湿地帯や森林を冠水させている。訪れたシェムリアップ市は、このトンレサップ湖の近くに位置し、平原部に豊富な水の供給を受け、カンボジアの農業を支えている（図 1-A－D）[1]。

シェムリアップ市はアンコール遺跡群の観光拠点となる都市である。はるか昔から歴代の王がその力を競い合うかのように都城を築いた地であり、町の周辺には数々の遺跡が点在している。世界的にも有名なアンコール・ワットやロリュオス遺跡群など、市内から一

A 雨季のトンレサップ湖

B トンレサップ湖周辺の高床住宅

C シェムリアップ市郊外（水田地帯）

D シェムリアップ市郊外の風景と住居

E アンコール・ワットの風景

F アンコール・ワットの風景

図１　カンボジア・シェムリアツプ市の風景.

歩外れれば、美しい田園と大自然の宝庫であるトンレサップ湖などの自然の宝庫もある。また、文化・歴史的には、さかのぼること 9 世紀初頭～１５ 世紀ころインドシナ半島の大部分とマレー半島の一部まで支配したアンコール王朝（クメール王国）の王都であった。シェムリアップ市は、その昔、農業王国としてもまた、もっとも豊かな水の都でもあった[2,4]。

市内のアンコール・ワット（寺院がある都市）は王都のシンボルであり、それ以外にも数百を超える大小さまざまな宗教施設（寺院）が周囲にひろがっている。水を支配するものは国を支配するといわれ、アンコール・ワットはクメール王国の農業を支える治水技術を

示す宗教施設でもある。アンコール・ワットの造営から遅れること半世紀頃、周囲 3 ㎞の城壁・濠に囲まれた王都が造られ、それはアンコール・トム（大きな町）と呼ばれた。アンコール王朝とともにその跡を残すのがアンコール・ワット、バイヨン寺院であり、クメール建築美術を語る上では欠くことのできない遺跡群が存在する地である（図 1-E, F）[2]。

３．カンボジアの歴史

現在のカンボジアを語る時、アンコール王朝時代の文化や歴史とともに、18 世紀頃からのフランスの植民地時代、第二次世界大戦時の日本軍の侵攻、ベトナム戦争、ポル・ポト政権がクメール・ルージュの名のもとに行った大量の人民の虐殺、その後の政権争いに伴う内戦と政治的混乱を抜きにしては語れない。とりわけ、カンボジア共産党書記のポル・ポトが政権をにぎり、内戦による農業の破壊、食糧輸入援助の停止といった混乱状態の中、ポル・ポト政権がカンボジアの民衆に与えたダメージは大きく、ポル・ポトが掲げるクメール・ルージュは、都市住民の糧は都市住民自身に耕作させるという極端な原始共産制社会への回帰政策を実行し、都市居住者、資本家、技術者、学者・知識人などから一切の財産・身分を剥奪し、郊外の農村に強制移住させ、旧政権関係者、都市の富裕層や知識層、留学生、クメール・ルージュ内の親ベトナム派の多くの人々が反乱を起こす可能性があるという理由で処刑した。そして 1975～1979 年のポル・ポト時代の 4 年間の中国の毛沢東主義を奉じた極端な農本主義政策は、貨幣も廃止されたが、これらの非効率的なやり方はカンボジアの出生率を異常に低下させた。一方でそれに続く大旱魃は、飢餓と虐殺により 100 万人とも、200 万人ともいわれるカンボジア民衆の大量の死を招いた。その後、ポル・ポト政権と対立するベトナムがカンボジアに侵攻し、今まで局地的に行われてきたアメリカ軍によるカンボジア空爆は、都市部を含めたカンボジア全域に拡大し、数十万人の農民が犠牲となった。そのことが大量の国内難民を産み、農業生産は激減し、内戦は更に泥沼化した。1991 年、カンボジア和平パリ協定が開催され、国際連合カンボジア暫定統治機構（UNTACUnited Nations Transitional Authority in Cambodia））"の設置、カンボジア最高国民評議会（SNCSupreme National Council of Cambodia）が結成され、UNTAC は、武装解除や憲法制定議会選挙の準備に取り組んだ。しかし、ポル・ポト派によるゲリラ活動や選挙準備の妨害が頻発し、PKO(国連平和維持活動 Peacekeeping Operations)は困難を極め、そのため多くのカンボジア人がこれらの戦争の犠牲となり、破壊された国土とともに失われた社会、経済基盤、奪われた多くの命の痛手は、国際社会の支援を受けていても、今なお多くの問題となっているのが現状である[1-3]。

４．孤児院ツアーにみる戦後のカンボジア

カンボジアの国民全体の生活水準は低く、労働人口の約 70%が農林水産業に従事し、国全体の貧困層の約 90%が農村部にいるといわれている。長期にわたる戦乱と国際的孤立はカンボジアの自然資源、人的資源を破壊し、これらの後遺症は現在においても国の発展の妨げの原因になっている。現在のカンボジアの貧困の原因は、カンボジアの産業構造にも問題があり、貧困層の人々の資源の確保やアクセスが限られていること。医療、教育の機会の欠如のため貧困層から抜け出せないさらなる悪のサイクルがあること。不公正な統治のあり方なども指摘されている。

戦後復興著しい現在のカンボジアではあるが、人口 1.468 万人のうち約 60 万人位の孤児がいると推定され、いまなお増加しているとも言われている（2007 年のユニセフ世界子ども白書より）それは全人口の約 4.1%を占め、今回訪れたシェムリアップ市内の孤児院でも、戦争による孤児だけでなく、戦後の教育の立ち遅れや戦後復興に取り残され、一部の人々に富が集中することからくる貧困、それに伴う栄養障害やエイズの罹患率も高いことからくる病気などで親を亡くし、頼りとしたい親戚も貧困であるがゆえに、子どもたちを引き取って育てることができずに、孤児院に引き取られるケースが多いと聞かされた（図 2-A,B）。

訪れた孤児院では、明るく元気にはしゃいでいる子どもたちに接し、「子どもは未来」ということを思わずにはいられなかった（図 2-C）。しかし、今回のカンボジアを訪れる前に、カンボジアの旅行案内に「孤児院ツアー」なるものの紹介があり、それらをひも解くと、孤児院での訪問に合わせた寄付を募る活動であり、短期間でのボランテイア活動を紹介するものであった。ただ、ここで忘れてはならないことは、ユニセフによると今、カンボジア国内ではおよそ 500 の孤児院があり、約 12.000 人の子どもたちを収容しているという。そのうちの 10 分の 1 の施設だけが公営で、残りは民間あるいは宗教団体が設立した孤児院である。多くの孤児院は存続するために観光客らからの慈善寄付に頼って運営されている。カンボジアの孤児院で生活している子どもたちは、両親または片親がいない（死別または身寄りがない）親はいるが貧困や虐待などの事情で孤児院に預けられている状況であり、大半のこどもには片親がいるという。カンボジアの多くの人たちが、子どもを孤児院に送れば、国の費用で教育が受けられ、良い生活ができると信じている。愛情を持って育てている孤児院もあるが、ある孤児院では、孤児たちは午後の活動（授業）と称して、草で帽子を作り、夜の伝統的なクメールダンスショーで着る帽子や衣装に緑や黄色でペンキを塗る仕事を行っている[4-6]。

A シェムリアップ市内の市場風景

B 孤児院訪問

C スバエク（影絵芝居）作りの体験と子どもたち

図２　シェムリアップ市内と孤児院訪問の様子

５．孤児と観光業

毎日開催される 30 分のイベントは子どもの出演者に対しての感謝の気持ちを込めて寄付をする観光客で賑わう（図 2-D)。プノンペンやシェムリアップなどの大都市では孤児院訪問は、「観光名所」になってきていると。子どもたちは自分たちの生活のために観光客に対し、物乞いやショーを開催することにより、自らの生活資金を調達することを期待されているのではないか。この子どもたちのリスクについてもっと観光客として訪れるわたしたちは考えるべきではないか。社会から取り残された都会の子どもたちと若者に働きかける地域団体、フレンズ・インターナショナルによるとこの観光によって、孤児院の数が増加しているという。この観光業が結果として非常に貧しいが、実際は少なくとも一人は親がいる多くの子どもたちを孤児院に収容することを促しているのではないかともいわれている。カンボジアの子どもたちの明るい未来に水を差すことになっていないかを訪れた私たちは、そのことを考えなければならないという警鐘がならされていることを忘れてはならない[6]。

６．アンティエ・プレ・スクール訪問
－地域に根ざしたこども教育をめざして－

カンボジアでは、ポル・ポト時代には教育もまた否定され、多くの教員を失い、教育システムは壊滅的な状況に陥った。この大規模な教育システムの破壊は、現在も教育復興の足かせとなっている。カンボジア教育省は、基礎教育の充実を目標にしているが、教員の質の低下、都市部と農村部の教育格差、高い退学率・留年率など多くの問題をかかえている。子どもたちの教育機会の欠如を国際社会からの支援で何とか食い止めようと、本校の設置母体からの支援に基づき、教育支援の１つと位置づけてもよいのではないかと思われるアンティエ・プレスクールが設立されている。今回はそこを訪問させていただいた。シスター黒岩氏より、本団体が 2004 年からの活動に至った経緯や当地に学校が設立されるまでの地域の状況を聞くにつけ、まずは、子どもたちが食べることができ、十分な栄養をとっての体づくり、そして体を清潔にして病気などから身を守ること、そこからの支援を始めたことなどを聞くことができた（図 3)。

シスターたちの慣れない風土のなか、バラックのようなテント暮らしをしながらの活動であったことや蚊と暑さ、さらにはマラリア等の感染症とも闘いながらの日々であったことなど、戦後のカンボジアの人々が置かれていた過酷な現状をシスターとの語らいの中から垣間見ることとなった。そのような状況は、プレ・スクールの周辺の住宅事情（下記の写真、雨季でもあり、住宅の入口際まで水が浸水して、そこには、緑色の浮き草が繁殖していた）からも知ることができた。

訪れたプレ・スクールは、そのような背景もあり、施設内にはシャワールームなどをも備えたとても近代的な建物であった。夏休みにもかかわらず、大勢の子どもたちとその保護者の方々が集まってくれ、とても楽しい時を過ごすことができた。この多くの地域の人々やこどもたちが集まってくれた背景には、シアターたちの地域に根差した過酷なまでの奮闘とともにその人々の中に溶け込んでの関わりや活動が大きな役割を果たしてくれたことを思わずにはいられなかった。

また、近年、近隣周辺には小学校や高校なども建ってきており、生活習慣のみならず、教育という観点からも幼児教育がなされるようになってきていると聞いた。この地が教育の出発点となり、少しずつ教育環境が整った地域となり、ここに暮らす人々のかけがえのない教育施設になり、この地域に根ざしたプレ・スクールになっていることが感じられた。多くの子どもたちに教育を受ける機会が与えられることを願わずにはいられなかった。

A アンティエ・プレ・スクール

B 校舎

C シスター黒岩との語らい

D 施設内のシャワールーム

E プレスクール近くの民家

F 訪問時のようす

G 住宅脇の河川

H 住宅のそばまで水が浸水している

図３　アンティエ・プレスクール訪問とその周辺地域のようす

７．アンコール小児病院見学からカンボジアにおける医療事情

度重なる戦争において医療基盤もまた壊滅的なダメージを受け、1993 年から 1996 年まで、アンコール・ワットの遺跡の撮影に度々カンボジアを訪れていた日本人写真家の井津は、病気であったり、怪我を負ったり、また栄養失調で苦しむこどもたちが過酷な生活・医療環境下に置かれ、この病気などで苦しむ子どもたちの姿に、深く心を動かされ、子どもたちのために何かできないだろうかとこの地での小児病院を建設することを決意した。世界各地で開いた自身の写真展での収益をもとに、1996 年フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーを設立し、世界中からの 6.000 人を超す医療専門家、篤志家、芸術家、友人たちの支えを受けて、アンコール遺跡があるシェムリアップ市にアンコール小児病院は開院した[5]。

アンコール小児病院は一日平均 400 人、多い日でも 600 人近くの患者が訪れるカンボジアでも有数な大きな病院である。外来では小児疾患統合管理システムを取り入れたトリアージにより、看護師が事前に患者の重症度に優先順位をつけ診療にあたっている。これにより重篤な患者には、迅速に対応し効率的な診療が行われている。しかし、患者の多くは農村部からの訪問者であり、登録料（初診・再診料）以外は入院、治療は原則、無料ではあるが、払える人が半分ぐらいといわれている。カンボジアでは、健康管理が一般的ではなく、悪化してから来院する患者が多く、また貧困も受診の遅れに拍車をかけている。ときには親戚や近隣の人々から多額の借金をしたり、自宅を売り払ってようやく病院までの交通費を捻出しての受診となり、受診時には手遅れになってしまっていたり、重篤な後遺症に陥ったりするケースがあると聞かされた。わたしたちが訪れた当日も、写真にあるように多くの患者と家族が受診を待っていた。病院には世界各国からの医療スタッフらの協力のもと最新の医療が受けられ、カ

A アンコール小児病院の外来のようす

B 訪問にあたっての寄付金贈呈

図４　アンコール孤児院訪問

アンコール・ワット遺跡群の壁画より
（You　Tube　投稿写真より　2010/12/26）

図５　当時のお産の風景

ンボジアの医療に携わる人々の養成も兼ねた地域基幹病院になっている。とくにカンボジアでは眼科や小児歯科治療が受けられる施設が少ないため月に 800 件以上の小児歯科診療も行われている。実際の診療場面を見学することはできなかったが、カンボジアでの小児医療の最先端が、ここで受けられるとのことで多くの患者で待合はあふれかえっていた（図 4）[4,7,8]。

８．カンボジアにおけるお産の状況

今回の研修旅行では、カンボジアにおけるお産事情を聞くことも目的の１つに挙げていたが、なかなか伺えるチャンスはなかった。カンボジアの人口は2013年3月時点で、14,676,591人。これは、5年前に実施された前回の国勢調査（人口センサス）よりも約128万人増え、増加率は1.46%である[7]。

約15年前のカンボジアレポートによると、お産は病院でおこなわれること少なく、自宅での分娩が主であり、特に農村部では約9割が自宅で行われ、お産の7割は伝統助産師と呼ばれる人たちが介助にあたっていた。医師、助産師、看護師が今なお、不足している状況からカンボジアにおけるお産事情は、あまり著しく変化は遂げておらず、農村部での状況はあまり変化がないようである。都市部においては少しずつ（約40%位とも言われているが）ではあるが、病院等での施設分娩が増えてきている。また、日本でいう助産師や医師が立ち会う分娩は未だ少なく、伝統助産師といわれる助産師や免許を持った助産師をともなっての家庭分娩が行われているのが現状である。まだまだ、看護教育も発展途上であるといえ、さらにはカンボジアにはまだ看護師の免許制度がない。看護学校の規定の教育課程を終えれば看護師になれる。そして、看護師の社会的地位も低いのが現状である[9,10]。

アンコール小児病院のような病院施設も少しずつ増えてきている。課題は「質」の向上であり、人材育成の観点から看護および医療職の育成が海外からの支援を受けて実施されているが、各地の主な地域に病院施設とともに医療教育施設の設立とともに教育の必要性が理解され、実施されていくともっと医療事情は改善されていくのではないだろうか。これからわたしたちができる支援とは何かを考えていかなければならない課題であると思う。

ところで、訪れたアンコール遺跡の壁画からも出産の風景が描かれていることを紹介しておく。残念ながら、私自身が撮影することができなかったので、コピーを添付することとする（図 5）。

９．研修を終えて・・・これからの母子保健活動への課題

研修を終え、多くのことを考える機会となった。子ども時代は成長の時期であり、身体や心の健康を保つことはもちろん、教育を通じて生きていくために必要な知識やスキル、社会性を身につけ、将来に備える大切な時期である。成長途中の未熟な体で重労働を課せられることによって健康が損なわれたり、教育を受けられないことによって最低限の読み書きでさえできなければ、将来おとなになった時、自立して生きていくことは難しい。さらに、基本的な衛生に関する知識もまた身につけなければ、自分の命さえ守ることもできない。児童労働は、子どもが自分の力で命を守り将来を切り拓く可能性を妨げ、子どもの未来を奪うことになるともいえる。アンコール・ワットなど世界遺産の遺跡群に沢山のこどもたちが群がって観光客を相手にみやげものを売っている姿は、本来の子どもとしての学ばなければならない機会さえも生活のために奪われているのではないかと考えると、恵まれた環境下にいるわたしたちにできることは何か、支援することとは物を与えるではなく、その地で豊かに生きていけるよう、どう子どもたちを育て見守っていくのかの視点で支援というものを考えていかなければならないのではないかと思った。助産師として多くの子どもたちが命を脅かされている環境の中にいることは、大変切ないものであることなどを感じて帰国してきたしだいである。過酷なカンボジアの事情を知るにつけ、人々が飢えない豊かな国づくりをめざして歩んでいるカンボジ

アが、貧しい中にも希望をもって生きていけるようにと思わずにはいられなかった。そして、カンボジアの未来、それを支えるのは、きらきらと目を輝かせていた子どもたちの明るい笑顔であった。この子どもたちのかがやく笑顔と豊かさを支えていくためには、教育の大切さを改めて考えさせられた。その教育に十分な支援とともにカンボジアの明るい未来に期待したいと思う。

文　献

[1] 上田広美，岡田知子(編著)：カンボジアを知るための 60 章．明石書店 (2006)

[2] 地球の歩き方　カンボジア編．ダイヤモンド社 (2014)

[3] 総務省統計局：カンボジア 2013 年中間年人口調査速報結果．総務省統計局 (http://www.stat.go.jp/info/ meetings/ cambodia/cips_pr.htm)(2013)

[4] ユニセフ：世界子供白書 2005 年．ユニセフ (2005)

[5] Cambodia's orphanages target the wallets of well-meaning tourists. INDEPENDENT Friday 25 March 2011 (2011) (http://www.independent.co.uk/news/world/asia/cambodias-orphanages-target-the-wallets-of-wellmeaning-tourists-2252471.html)

[6] カンボジア孤児院の誤解と現実．Friends International (2014) (http://www.friends-international.org/ ourprojects/myth-realities_detail.asp)

[7] JICAカンボジア事務所：カンボジアだより．September 16, No. 25 (2013)

[8] JICAカンボジア事務所：カンボジアだより．September 16, No.　1 (2011)

[9] 佐藤眞理：カンボジアのお産と伝統助産婦たち．助産婦　54, 50-52 (2000)

[10] JICAカンボジア事務所：カンボジアだより．April 21, No. 32 (2014)

論文集「人と環境」Vol. 8 (2015)
大阪信愛生命環境総合研究所編